

「読書」の変化とこれからの図書館サービス

伊 東 達 也

問題の所在

いま、読書のありかたが、以前と大きく変わってきている。毎日新聞社の『読書世論調査』によれば、2000年代はじめまでは増減を繰り返していた読書時間は、2009年にはすべての年代で減少に転じており¹、30歳以下の若者世代についてみると、2005年頃まではいわゆる「読書離れ」の傾向はそれほど進んでいなかったものの、それ以降は明らかに読書時間が減少している²。

一方、2005年のNHK放送文化研究所「国民生活時間調査」では、雑誌・マンガを含めた本については、平日では18%の人が読書をしていると回答しており、その1日あたりの平均は1時間9分、読んでいない人も含めた全体の平均読書時間は1日あたり13分という結果が出ている。この調査では、同時に趣味・娯楽としてのインターネットの利用時間も尋ねているが、仕事以外で利用するウェブの閲覧、オンラインゲーム、ネットオークションなどに費やす時間（メール、掲示板などでの時間は除く）をみると、平日で全体の13%がインターネットを利用していると回答しており、利用者の平均は1時間38分（土曜・休日では2時間以上）、インターネットをしない人も含めた平均利用時間は1日に13分であり、これは読書時間とまったく同じであった³。

情報環境が変化したことの影響で、日常生活のなかの読書に費やす時間がはっきりと減少しはじめた境目が2000年代（2000～2009年）頃にあることがうかがわれる結果であるが、このことは単に、それ以前と比べて本が読まれなくなったということだけではなく、インターネットの普及によって生まれた「情報」の消費にかかる時間と、従来の「読書」の時間が、いわば「トレードオフ」の関係になったことを示すものであり、これ以降、日常生活における読書行為の意味も意義も変わってきたと考えるべきであろう。そして、このような変化の要因には、インターネットをはじめとする情報環境の変化だけでなく、背景として2000年代以降の政治や経済などの社会状況も大きく影響している。

そこで本稿では、この読書の変化の主要因について考察するとともに、現代社会の「読書」の状況に対応した、これからの図書館サービスについて検討を加える。

¹ 『読書世論調査2010年版』毎日新聞東京本社広告局、2010年ほか。

² 清水一彦「若者の読書離れ」という“常識”の構成と受容』『出版研究』45、2014年。

³ 『2005年国民生活時間調査報告書』NHK放送文化研究所、2006年。

(1) 読書の変化の要因 ①：情報環境の変化（SNSと読書）

倍速視聴と同調圧力

稲田豊史は、現在、若年層を中心に映画などの映像作品を倍速視聴する習慣が定着していることについて、その理由を以下のように整理している⁴。

- ① 映像作品の供給過多（配信サービスをはじめとした映像供給メディアの多様化・増加）
- ② 現代人の多忙に端を発するコスパ・タイパ志向（SNSによって共感を強要され、周囲が見えすぎしてしまうことで「個性がなければサバイブできない」と焦り、失敗を恐れる若者の気質）
- ③ セリフですべてを説明する映像作品が増えたこと（SNSで“バカでも言える感想”が可視化されたことによる「わかりやすいもの」が求められる風潮の加速と、それに伴う視聴者のワガママ化）

要因として共通しているのは、インターネットやスマートフォン、SNSなどの普及にともなう日常の情報環境の変化であるが、これはインターネットが登場した1990年代後半以降、年月単位で機器の機能やサービスが更新され、このことが逐次われわれの生活行動に影響を及ぼしてきた結果と考えられる。

X世代（1960年代後半～1970年代生まれ）、Y世代（1980～1990年代前半生まれ）、Z世代（1990年代後半～2010年代生まれ）という世代の区分があるが、この区分によれば、X世代はテレビ・ラジオ・雑誌などのアナログ中心の情報環境から、成人後にインターネットやスマートフォンなどのデジタル中心の情報環境への移行を経験してきた世代であり、Y世代は社会人になる前からインターネットやパソコンのある環境で育ってきた「デジタルネイティブ」、Z世代は幼少期からスマートフォンやSNSに馴染んできた「ソーシャルネイティブ」ともよばれている。

映像作品の倍速視聴という情報行動の背景にSNSの常時接続という習慣があることについて、稲田は次のような事例をあげている。

「忙しい中、友達の話題についていきたいから倍速で観る」という声は、10代から20代の若者からとりわけよく聞かれる。…なぜそこまでして、話題についてい

⁴ 稲田豊史『映画を早送りで見ている人たち—ファスト映画・ネタパレーコンテンツ消費の現在形』光文社、2022年：p.281。

かなければならないのか。それは、若者のあいだで、仲間との話題に乗れることが昔と比べ物にならないほど重要になっているからだ。それをもたらしたのがSNS、おもにLINEの常時接続という習慣である。…LINEの友達グループは四六時中つながっている。文字通り、朝起きてから夜眠るまで。いつでも連絡できるし、常に何かしらの反応を求められる。…手っ取り早く盛り上がるのが、「あれ観た(聴いた)? おもしろかったよ。おすすめ」だ。映画やドラマやアニメ、あるいは楽曲など、つまりコンテンツについての話題である。このような話題を無視することは難しい。自分が話題に乗れないばかりか、反応を返さなければ波風が立つからだ。いわゆる「既読スルー」は、「その話題には興味がない」という積極的な態度と受け取られてしまうので、できれば避けたい。話題に出た作品はなるべく観て、感想をいう必要がある。そうしてグループの和を保つ。大学生を中心とした若年世代にとっては、仲間の和を維持するのが至上命題。…しかも、LINEグループは1つや2つではない⁵。

この事例にある大学生を中心とした若年世代は、まさに「ソーシャルネイティブ」とよばれるSNSとスマートフォンを常用している(せざるを得ない)世代である。この世代を中心として、映画やドラマなど映像の視聴だけでなく、音楽、ニュース、読書をも含めたほぼ全ての情報行動が、スマートフォンを介したSNSでのつながりによる「同調圧力」⁶の下で行われているとすれば、映画館での映画鑑賞が、いわゆる「ファスト映画」(数分~十数分で一本の映画を結末まで解説するネット上の動画)や倍速視聴に取って代られたように、読書のありかたにも大きな影響を及ぼしていると考えられる。

2021年に行われたデジタルメディアの接触傾向についての調査「メディア定点調査2021」(博報堂DYメディアパートナーズメディア環境研究所)によると、現代の生活者は、若年世代だけでなく全世代において慢性的に情報過多の状態になっており、その結果、時間を有意義に過ごすために「自分の好きなもの」に接するよう意識する姿が見られること、そしてその傾向は「偏ってもいいから好きなものだけに接したい」というレベルにまで達していることがわかる⁷。

⁵ 稲田豊史『映画を早送りで見ると観る人たち—ファスト映画・ネタバレ—コンテンツ消費の現在形』光文社、2022年：pp.122 - 124。

⁶ 太田肇『同調圧力の正体』PHP新書、2021年。

⁷ 博報堂DYメディアパートナーズコラム「コロナ禍で誕生した「Picky Audience」とは～始まったメディア生活の問直し～」(<https://www.hakuhodody-holdings.co.jp/> 2021年9月2日公開)。「情報が偏っても問題ない。必要になったら調べたらよい。情報過多になるのが嫌」(Sさん37歳男性)、「情報があふれているので、自分で主体的に何の情報か欲しいのかという意味が必要」(Fさん63歳男性)、「興

デジタル機器については、現在では、自分の好きな情報やコンテンツだけで視界を埋めることができるようになっており、自分と同じ意見の人だけをフォローするSNSや、興味のあるニュースが先頭に来るようにカスタマイズされたニュースサイトなどに囲まれて過ごすことができるようになってきている。アニメ映画作品と同様、ライトノベルとよばれる若年層向けの小説においても、わかりやすいもの（だけ）が求められる風潮に加え、「癒しや安心が得られるものだけを見たい」、「つらい描写を見たくない」という読者の要望・評価によって、発表される作品の内容や表現が大きく変わってきているといわれている⁸。

「失敗したくない」と読書

また、Z世代の情報行動には、「失敗したくない」ための「ネタバレ消費」という特徴があるといわれている⁹。ネタバレ消費とは、あらかじめ商品の内容や中身を知ってから（ネタバレしてから）購入する消費行動のことであり、大量のコンテンツが溢れる現代では、玉石混交の情報の中からいかにして「当たり」を引くかが重要視されるようになったことが背景にある。

「ファスト映画」が受け入れられた理由もそこにあり、「あふれるコンテンツの中から他を差しおいてせつかく時間を費やすのだから、最後まで見続けたい。そのためには、後悔せずに見終わることができるという安心感が必要になってきます。だからショッキングな出来事をあらかじめ知っておき、自分の感情が、必要以上に揺さぶられることを避けている…彼らは先のわからないことや想定外の出来事が起きて気持ちがアップダウンすることを“ストレス”と捉える傾向が強い」¹⁰と分析されているが、これが、先にあげた映画やライトノベルでの「自分が理解できて楽しめる」「好きな情報しか見たくない」という「快適主義」につながるならば、SNSでのつながりのなかで「消化」しなければならないコンテンツのひとつとしては、「ネタバレ消費」も難しく、倍速視聴もできないアナログでの読書は、敬遠されてしまうのは明らかであろう。

味のないことは頭に入ってこない。自分で好きな情報を選びたい」（Fさん26歳女性）、「時間を割くなら自分の好きなものに。時間がもったいない」（Nさん39歳女性という回答がみられた。

⁸ 稲田豊史『映画を早送りで見ると観る人たち—ファスト映画・ネタバレ—コンテンツ消費の現在形』光文社、2022年：pp.189 - 194。

⁹ 稲田豊史『映画を早送りで見ると観る人たち—ファスト映画・ネタバレ—コンテンツ消費の現在形』光文社、2022年：p.165。

¹⁰ 牧島夢加「Z世代に流行する『ネタバレ消費』とは？ “失敗したくない”若者のホンネ」(Business Insider Japan <https://www.businessinsider.jp/>)

(2) 読書の変化の要因 ②：政治・経済状況の変化（新自由主義と読書）

新自由主義と「ファスト教養」

一方、読書が変化し始めた2000年代初頭は、政治・経済などの社会状況がそれ以前と大きく変わった時期でもある。

20世紀のはじめ、多くの資本主義国が年金や医療などの社会保障を重視した福祉国家モデルを採用した結果、先進国では社会の中核を担う中間層が生まれてきたが、その一方で1980年代頃になると、政府の役割が大きくなり過ぎたことの弊害として、経済成長のパワーが落ちてきた。そこで、アメリカのレーガン大統領やイギリスのサッチャー首相などを中心に「市場重視」、「株主重視」、「官から民へ」といった言葉に象徴される新自由主義的な政策が世界的に推進された。こうした新自由主義的な政策の流れは現在まで続いているといえるが¹¹、わが国において新自由主義的な政策が最も顕著に行われたのは、「新自由主義の日本版」¹²ともいえる、いわゆる「小泉構造改革」の時期であった。

2001年4月に首相に就任し2006年9月に退任した小泉純一郎は、「構造改革なくして成長なし」のスローガンのもと、アメリカの政策に忠実な新自由主義・市場原理主義を政治経済理念としていた。「新自由主義」とは、政府などによる規制の最小化と自由競争を重んじる考えかたであり、このイデオロギーを支えるキーワードには「市場万能主義」、「小さい政府」、「健全財政」（緊縮財政）、「トリクルダウン」、「フラット税制」、「累進課税の否定」、「福祉国家の否定」、「金融万能主義」（マネタリズム）、「財政政策（公共投資による景気振興策と富の再配分政策）の否定」、「規制緩和」などがある¹³。

「聖域なき構造改革」というキャッチコピーが流布した2000年代はじめから、わが国でも市場万能主義に基づく公的企業の民営化、政府規制の緩和、国と地方の三位一体の改革などの政策が進められ、「格差が出るのは別に悪いこととは思っていない。いままで悪平等との批判が多かった」、「企業も国も地域も個人も『自助と自立』が大事な精神だ」¹⁴という時流のなかで、「自己責任」という言葉が流行語となったのは2004年であった。

この時期に形づくられた「自己責任」と「市場適合」の風潮は、これ以降現在までも継続しており、われわれの「読書」にも影響を及ぼしていると考えられる。その一

¹¹ 自由民主党HP「新しい資本主義」って？(https://www.jimin.jp/vol8>interview)

¹² 後藤道夫『反「構造改革」』青木書店、2002年。

¹³ 菊池英博『新自由主義の自滅』文春新書、2015年：p.60。

¹⁴ 参議院予算委員会（2006年2月1日）における小泉純一郎の発言。

例が、近年「ビジネスパーソンには教養が必要」というメッセージで発信されるようになった「教養」を身につけるための読書である。

レジーは、「ファストフードのように簡単に摂取でき、『ビジネスの役に立つことこそ大事』という画一的な判断に支えられた情報」¹⁵としての教養を「ファスト教養」と名付け、教養が「ファスト」になっていくプロセスについて、以下のように分析している。

変化の大きい時代で「脱落」しないためには教養を学ばなければならない。そんなスタンスに立った場合、「人生を豊かにする教養」を悠長に学んでいる暇はない。「教養が足りないとビジネスシーンで使えない」「使えない、つまりは稼げない」という恐怖に苛まれる中で、教養に触れる際にもビジネスにとって重要な「スピード感」「コスパ」が重視されるようになる。そういったビジネスパーソンのニーズと課題に対して過不足なくミートしているのがファスト教養、といった構図である。…時代の流れについていきながら転落を防ぐためには教養が必要と信じている層の切実なニーズは、教養が受容される環境をますます「ファスト」に染めてゆく¹⁶。

この「ファスト教養」志向が高まる以前、1990年代に、その前段階としてビジネスパーソンのあいだで、特に「英語・IT・会計」についてのスキルアップが流行した時期があったといわれている。バブル崩壊後の90年代初頭から、会社でうまく立ち回れない人を中心に、資格を取れば何とかなるという“資格幻想”があり、そこに「結婚退職などせず資格を取って長く働こう」という女性たちが加わって、ビジネスパーソンの中にスキルアップの意識が定着していった。その後90年代後半の未曾有の就職氷河期になると、「頼れるのは自分しかない」と、資格取得で武装する若者が続出した¹⁷。

この流れが変わってきたのが2000年代の後半である。ビジネスパーソン向けの経済誌『週刊東洋経済』の2011年11月26日号で、「さらば！スキルアップ教 教養こそ力なり」という特集が組まれたことは、この転換の流れを象徴している。

「英語、IT、会計はしょせんツールにすぎない。スキルはすぐにまねされ陳腐化してしまう。真の価値を生み出すのは、深くて広い教養だ」¹⁸、「日々の業務を回すだ

¹⁵ レジー『ファスト教養 10分で答えが欲しい人たち』集英社新書、2022年：p.10。

¹⁶ レジー『ファスト教養 10分で答えが欲しい人たち』集英社新書、2022年：p.53。

¹⁷ 佐藤留美「スキルアップ教は日本人を幸せにしたのか」『週刊東洋経済』2011年11月26日号：pp.52-55。

¹⁸ 「さらば！スキルアップ教 教養こそ力なり」『週刊東洋経済』2011年11月26日号：p.43。

けの人には教養はいらない。ただし、資本主義の中でコア人材、マネジメント層として生き残るにはスキルだけでは足りない。5～10年後に会社はどうなるかを考え、意思決定する人には、より抽象度が高いことを理解し、世の中を俯瞰することが不可欠だ¹⁹という意図のもとで、経済分野だけでなく文学・歴史・哲学・宗教・政治などの人文知や数学・科学・工学分野をも含む「教養を磨くための170冊」の読書が勧められているが、この場合の「教養」とは、あくまでもビジネスに役立てるために要請されているものであることが特徴である。2000年代はビジネス書自体の出版点数が多く²⁰、話題となったものも多かったが、その中でも、教養を身につけることは（ビジネスを成功させるための）自分への「投資」であることを謳ったものが多く出版され、よく読まれていた²¹。

現在でも出版物のなかに「教養書」というカテゴリーが設けられており、ビジネス書とともに、古典やリベラルアーツ、社会科学、自然科学の基本図書100冊の内容を1冊にまとめた本がベストセラーになったりしているが²²、このような昨今の教養書ブームについて佐藤優は、「脅迫の教養」という概念を提示してその背景を考察している。

多くの方は、言われなくても「自分は教養が足りないかもしれない」「必要な知識をもっと身につけたい」という思いを持っているのではないのでしょうか。私がちょっと気になるのは、それにつけこんで…「脅迫の教養」と言えるような亜種が生まれて、おかしな発展形を遂げていることです。要するに「グローバル時代に恥ずかしくない教養を身に着けよう」ではなくて、「教養がないあなたは、このままでは中間層から脱落します」というメッセージが、いろいろなメディアを通じて発信されているのです。…かつては「みんなの知らないことをやって、ビッグになろう」という分かりやすいものでした。ところが、今はそうではなくて、「下層への転落」という恐怖を植え付けて、集客しようとしている²³。

¹⁹ 瀧本哲史「なぜ今教養なのか？」『週刊東洋経済』2011年11月26日号：p.45。

²⁰ 日本の公共図書館において「地域課題解決支援サービス」や「ビジネス支援サービス」が本格的に推進され始めたのはこの頃である（「地域の情報ハブとしての図書館－課題解決型の図書館をめざして－」文部科学省、2005年）。

²¹ 勝間和代『無理なく続けられる年収10倍アップ勉強法』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2007年。
勉強は幸せになるために、必要な投資であるということです。企業が設備や新製品開発に先行投資をしていないと生き残れないように、私たちも、繰り返し自分自身のキャリアに、勉強というかたちで自己投資をしていかないと、倒産してしまうわけです。

²² 永井孝尚『世界のエリートが学んでいる教養書必読100冊を1冊にまとめてみた』KADOKAWA、2023年。

²³ 池上彰・佐藤優『人生に必要な教養は中学校教科書ですべて身につく』中央公論新社、2020年：pp. 27-29。

佐藤の言う「脅迫の教養」の「脅迫」とは、まさに2000年代以降に形づくられた「自己責任」と「市場適合」の風潮のもとで生じた心情である。「下層への転落」を避け、現代の市場社会で生き残っていくために、強迫（脅迫）的に読書が求められているが、現在でも、新人会社員向けにかかれたビジネス書において、「教養」のための読書が以下のように推奨されている。

まずは、夏目漱石、司馬遼太郎、村上春樹、三島由紀夫。このあたりを全部読まなくてもいいのですが、一冊も読んだことがないと「さすがにどうなの？」と思われる。好きか嫌いかはどうでもいい。むしろ、嫌いでもいい。まずは、読んでみる。ただそれだけなので今からでもできます。そういうある種の一般教養のほうが、小手先のスキルよりも大切なのです。パソコンでいうと「OS」みたいな部分だからです²⁴。

仕事のための読書は「アウトプット」を前提として、アウトプットする場面を意識しながら、読むことが大切です。たとえば今度、石油業界の人に提案することになったとしたら、まずは石油業界に関する本を読んでおくことです。…議論や提案する場面でも、古典や有名な本から引用して発言したほうが、同じことを言うにしても情報に強度があります。説得力が違うのです。…古典といってもマルクスやニーチェくらいになると読むのが大変です。それならば、解説本でもいいでしょう。読まないよりは10倍マシです²⁵。

「好きか嫌いかはどうでもいい。むしろ、嫌いでもいい」から、パソコンのOSのような基本性能としての「教養」を身につけるために読書をする。そして、「読むのが大変」ならば解説本でもよいが、それもできなければ本以外のメディアでもよい。現在web上には、「ビジネス・教養系」と呼ばれるYouTubeチャンネルなどの動画コンテンツも数多く存在しており、その中には、ビジネス書や教養書の内容を短時間で解説しているものもあるが²⁶、これが「読書」の代わりとして消費されている。

²⁴ 田畑信太郎『これからの会社員の教科書』SBクリエイティブ、2019年：p.138。

²⁵ 田畑信太郎『これからの会社員の教科書』SBクリエイティブ、2019年：pp.161-163。

²⁶ 一例として「両学長リベラルアーツ大学」、「中田敦彦YouTube大学」、「大人の学びなおしTV」などがある（2024年9月1日現在）。

バブル期以前の読書と以後の読書

1990年代以前、戦後から高度経済成長期を経て、バブル好景気までの時期の読書は、いわば、自分を知り、社会を知るための方法であった。

唐木順三は、自身の読書体験について「たった一冊の書でも、その書が私自身一人をめあてにして、私のために、私を目覚まし、私の考えをのぼし、私の生き方をたしかめるために書かれたのだ、というそういう体験をもったひとは幸福な、仕合せなひとだと思う」²⁷という言葉を残しているが、読書によって世の中を知り、その社会に自らも参画して自己実現を果たすために、自分のことを知る。社会のことを知ることで、それをより良い方向に変えることができる。「小説は人間をその全体にわたって活性化させるための、言葉による仕掛け」²⁸といわれ、「読書の目的は、本の中から“たった1語”を探すことです。あなたの人生をかえていくきっかけの1語です」²⁹、「本を読む人はみんな、多かれ少なかれ、自分の今の状況を何か変えたいと思っている人だ…読書をする、なぜ、世界を変えることができるのか。その理由は、世界は言葉でできているから」³⁰、というような読書観が主流であった。

ところが、1990年代にバブルが崩壊し、急に不景気な時代になると、自分がこれからどうがんばっても変わりそうにない社会に関心に向けるのではなく、その社会にうまく適応できるように自分自身をコントロールすることを説く「自己啓発書」がよく読まれるようになる³¹。

そしてその後、日常の情報環境が大きく変化した2000年代以降の読書は、市場経済中心の新自由主義的な風潮に加え、デジタル情報とのトレードオフの状況のなかで、先にあげた「脅迫の教養」のような、市場に適合し、そこから脱落しないように自己管理するための「情報収集」へと変化していったのではないかと考えられる。

読書法・読書観の変化

実際の本の読みかた（読まれかた）も、2000年代以降は変化している。いわゆる読書法や読書術の著作は、近年ではビジネス書の一部として扱われるようになり、出版点数も多いが、その内容を見ると、速読法や、要点だけをピックアップする読書法などが一般化していることがわかる³²。

²⁷ 唐木順三『朴の木：人生を考える』講談社学術文庫、1977年：p.19。

²⁸ 大江健三郎『小説の方法』岩波書店（同時代ライブラリー）、1993年：p.11。

²⁹ 中谷彰浩『大人のスピード読書法』ダイヤモンド社、2000年：p.178。

³⁰ p h a『人生の土台となる読書』ダイヤモンド社、2021年：pp.18-19。

³¹ 三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』集英社新書、2024年：pp.168-175。

1995年にベストセラーとなった『脳内革命』（春山茂雄著、サンマーク出版）が代表的である。

³² 『「1冊10分」で読める速読術』（佐々木豊文著、三笠書房、2010年）、『1冊20分、読まずに「わかる！」』

一般的な本の場合、むしろ読み通そうと考えるほうがいい。その本から自分の知りたい知識だけ引き出した時点で「読了」と見なしていいのです。全体のうち二～三割でも読めば十分でしょう。その代わり、より多くの本に出会い、エッセンスだけを片っ端から吸収していく。「この一章分だけ読む」「〇〇について書いている部分だけ読む」という具合でもいいのです。…実際、世の中の「読書家」と呼ばれる人ほど、読み通すことにこだわっていないと思います³³。

通読を目的とせず、「その本から自分の知りたい知識だけ引き出した時点で読了」と見なし、「その代わり、より多くの本に出会い、エッセンスだけを片っ端から吸収」という読書法は、現代の本の読みかたとして標準的なものと思われるが、ここには、web上のコンテンツも含めた多種多様な形式の情報（源）の存在を前提として、その情報源のひとつである「本」から、必要な情報を得るという行為が「読書」とあるという読書観に基づいているといえる。

しかし、従来（1990年代以前）は、「著者の思想を正確に理解する」ためには「とにかく全部よむことが必要」³⁴という、通読を基本とする読書観が一般的であり、なかには、著者の考えを理解するために「その人の全集を日記や書簡の類に至るまで隅から隅まで読んでみる」ことを勧める読書法も知られていた³⁵。

読書とは著者との対話、心の交流であり、本を読むことは著者の思想を正しく理解することである。古典を読むことは先人の声を聞くことであり、その知恵を継承することである。だから、要点だけを摘読するのではなく、最初から最後まで通読する読みかたが基本であり、「一書の人を畏れよ」というように、多読よりも一冊の本を最初から最後まで精読することのほうが望ましい。

このような読書観が薄れた現代においては、読書という行為が、数多のコンテンツのひとつである一冊の本のなかから、自分に必要な情報を取り出す情報処理作業と

すごい読書術』（渡邊康弘著、サンマーク出版、2016年）、『東大読書』（西岡宥誠著、東洋経済新報社、2018年）などがある。

³³ 斎藤孝『本をサクサク読む技術』中公新書ラクレ、2015年：pp.23-24。

³⁴ 梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波新書、1969年。

娯楽としての読書なら別だが、一般には著者の思想を正確に理解するというのは、読書の最大目的の一つであろう。内容の理解がどうしてもいいのなら、なにも時間をかけて読書する必要はない。内容の正確な理解のためには、とにかく全部よむことが必要である。半分よんだだけとか、ひろいよみとかは、本のよみかたとしては、ひじょうにへたなよみかたである。時間はけっこうかかりながら、目的はほとんど達しない。いわゆる「ななめよみ」で十分理解したという人もあるが、あまり信用しないほうがいい。

³⁵ 小林秀雄「読書について」『小林秀雄全集』第4巻、新潮社、1968年。

らえられている観があるが、一方で、

本を読むというのが、新しいものの見方、感じ方、考え方の発見を誘われることでないなら、読書はただの情報にすぎなくなり、それぞれの胸のなかに消されないものとしてのこの何かをもたらすものとしての、読書の必要は失われます³⁶。

ググればどんな情報でもすぐに出てくる今の世界では、情報を暗記していることにはほとんど意味がない。情報自身より大事なものは、情報を活用するための文脈や思想で、本というのはそれを与えてくれるもの³⁷

という言説も行われていることからすれば、読書することは、単なる情報収集にとどまらず、著者との対話を通じて、情報を活用するための「文脈や思想」、いまの自分にはない「新しいものの見方、感じ方、考え方」を得ることができる他にはない方法であるという認識が、いまでも存在していることがわかる。

(3) これからの図書館サービス

いまこそ「自由読書」を

三宅香帆は、現代の「読書」と「情報」の関係について、情報とは「ノイズの除去された知識」であり、読書して得る知識にはノイズ（偶然性）が含まれていて「教養と呼ばれる古典的な知識や、小説のようなフィクションには、読者が予想していなかった展開や知識が登場する」ところから、そのノイズを頭に入れる余裕がなく、自分に関係のあるものばかりを求めてしまう現代人は「働いていると本が読めなくなってしまっている」としているが³⁸、先にあげた、慢性的情報過多の状況や、SNSでのつながりによる同調圧力、ビジネスにおける「脅迫の教養」、失敗したくないゆえの「ネタバレ消費」も、いわば、偶然性が含まれる情報を受入れる精神的・時間的な余裕のなさから生じた現象であるといえる。

その人の全集を、日記や書簡の類に至るまで、隅から隅まで読んでみるのだ。さうすると、一流と言はれる人物は、どんなに色々な事を試み、いろいろな事を考へてみたかが解る。彼の代表作などと呼ばれてゐるものが、彼の考へてゐたどんなに沢山の思想を犠牲にした結果、生まれたものであるかが納得出来る。…ほんの片言隻句にも、その作家の人間全部が感じられるといふ様になる。これが、「文は人なり」といふ言葉の真意だ。

³⁶ 長田弘『読書からはじまる』ちくま文庫、2021年：p.97。

³⁷ p h a『ゆるくても続く知の整理術』だいわ文庫、2019年：p.97。

³⁸ 三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』集英社新書、2024年。

しかし、情報行動としての読書の特徴は、基本的に時間的な制約がないところにある。読書の時間は、情報の送り手ではなく、読み手のほうが管理している。本を読むスピードも、途中で止めることも読み手の自由である。また、読書は本を通じた著者との対話であるが、その対話の主導権は常に読者の側にあるとあってよく、時間の制約を超越して、自分に必要な時間を十分にかけて、一人で著者と対話できるのが読書である³⁹。

長田弘は、本が情報のデータのために使われるようになって失われてきたのは、「習慣としての読書」⁴⁰であるという。情報収集のためなら、本は一回だけ読めばよい。しかし、対話としての読書ならば、同じ本を繰り返して読むことがありうる。「ダイアログとしての読書は、つねに少しでも新しい自分に生まれ変わるために行われる」⁴¹といわれるように、二度目に読む自分は最初に読んだ自分とは変わっているの、同じ本でも何度も楽しむことができ、生活習慣にすることができる。

以上のような、デジタル情報にはない「読書」の特徴を活かすことで、情報過多や同調圧力によって閉塞感の高まった現代人の日常生活のなかに、「少しでも新しい自分に生まれ変わる」ための「習慣としての読書」を取り戻すことができるのではないだろうか。そしてその際に有効と考えられるのは、1980年代のアメリカで、リテラシー危機への対策として行われた「自由読書」(Free Voluntary Reading：FVR、以下「自由読書」)という方法である。

「自由読書」とは、読みたいから読むという読書です。…「自由読書」とは、読みたくない本は読まず、別の読みたい本を選ぶという読書です。リテラシーのレベルの高い人ならば、いつもあたりまえにやっている読書です。…研究成果からわかったことは、子どもとか、あまり自由自在に読めないおとなの娯楽的読書では、よい結果が期待できるということです。読解力が向上し、むずかしい学術的な文章をずっと完璧に理解できるようになります⁴²。

この「自由読書」の考えかたに基づき、これまで成果をあげてきた取り組みには、当時のアメリカの小・中学校で実践された「黙読の時間」(Sustained Silent Reading：SSR、以下「黙読の時間」)と、これをモデルにして1988年に千葉県的女子高校で始められ、その後日本中の小・中・高校に広まって現在でも行われている「朝の読書」

³⁹ 伊東達也「読書の重要性和図書館」『読書と図書館：図書館の最前線4』青弓社、2008年：p.19。

⁴⁰ 長田弘『読書からはじまる』ちくま文庫、2021年：p.205。

⁴¹ 戸田山和久『教養の書』筑摩書房、2020年：p.93。

⁴² スティーブン・クラッシュン『読書はパワー』長倉美恵子ほか訳、金の星社、1996年：p.10。

がある。「黙読の時間」の四原則⁴³は次のようなものである。

- (1) 一定の時間だけ、読ませること。教師や親はそれぞれのクラスや家庭に「黙読の時間」を導入し、子供の熟達に応じて調整すること。教室の場合は10分ないし15分が望ましい。
- (2) 読むための素材は子供自身に選ばせること（本、雑誌、新聞など）。その時間内はほかの読み物と取り替えないこと。素材はすべて事前に選んでおくこと。
- (3) 教師や親も、読むことで手本を示すこと。これは何よりも大切なことである。
- (4) 感想文や記録のたぐいはいっさい求めない。

「黙読の時間」とは、周囲からの強制ではなく、自分自身の「読みたい」という気持ちだけに従って行う「自由読書」ができる時間を学校生活の中に確保することによって、子どもたちに読書の習慣を根付かせようとする試みであるが、このプログラムが成功するポイントは、生徒だけでなく教師や事務職員などのおとなも参加することにあることが、当時から指摘されていた⁴⁴。

「黙読の時間」プログラムが最大の成果を生むのは、学校ぐるみで取り組んだ場合であることを決定的に物語っている。…この時間は、生徒だけでなく、校長、教師、事務職員など全員がそれまでしていたことを中断し、読むものを手にする。何を読むかは、各自の選択に任されている。校長のジェイムズ・ルータットは、次のように語っている。「われわれが『黙読の時間』プログラムを取り入れることを決めたのは、生徒たちに、読書は生徒だけではなく、すべての人にとっていかに大切で楽しめるものかを教えるためです。いまでは、その時間は一週間のうちで最も人気のある時間の一つになっています。全員が、その時間を楽しみにしています。その25分間は、いっさい仕事は禁止です。ええ、可能ならば電話にも出ないのです」⁴⁵。

一方、「朝の読書」にも「①毎日やる、②みんなでやる、③好きな本でよい、④ただ読むだけ」という4原則があるが、このルールに加えて「大事なことは先生方も教室で一緒に読むことです」、「全職員がそれぞれの持ち場で、生徒と同じ条件で一斉に

⁴³ ジム・トレリース『読み聞かせ この素晴らしい世界』 亀井よし子訳、高文研、1987年：p.261。

⁴⁴ McCracken, R, and M. McCracken. 1978. Modeling is the key to sustained silent reading. *Reading Teacher* 31 :406-408.

⁴⁵ ジム・トレリース『読み聞かせ この素晴らしい世界』 亀井よし子訳、高文研、1987年：pp.264-265。

読むことが理想的です」と、生徒だけでなく教職員も一緒になって読書することの重要性が強調されており、「毎朝、ホームルームや授業のはじまる前の10分間、生徒と先生がそれぞれに、自分の好きな本を黙って読む。たったこれだけのことなのです」、「わずかな時間でも、毎日続けることで読書が好きになり、豊かな心と人格の形成が育まれていきます」、「朝の読書」は、本を読むきっかけを作る最良の方法ではないでしょうか⁴⁶と、子どもだけでなくおとなにとっても効果的な方法であることが謳われている。

「朝の読書」の創始者のひとりである林公は「朝の読書」の意義について、

「朝の読書」は、疲れ切った大人（教師）にも子どもにも、まずは休息と安らぎを与え（みんなでやる）、今日と明日を生きる力を身につけさせ（毎日やる）、自分自身とはなにか、どう生きればよいかを考えさせ（好きな本でよい）、生きるとは、生きることそれ自体に意味があることを体験させる（ただ読むだけ）ために考えだされたものです⁴⁷。

と語っているが、これは、読書という精神的な営みを、全くの個人の自由意思によって行う、そのような時間を生活のなかに持つことが、人間が生きていくためには必要であるということを示した言葉といえよう。

毎朝10分間の読書が高校生を変えたように⁴⁸、「自由読書」は、それが短時間であっても、日常生活のなかに定期的に、できれば毎日、一定時間確保されることによって、その効果は高まるのである。自分に関係のない、偶然性が含まれる情報（ノイズ）を受入れるための時間的な余裕を、あえて生活の中に設けること。その時間の使いかたにも自由を貫くことが「自由読書」である。そしてそのことによって、自分にとっての「新しい文脈」⁴⁹をつくる読書が習慣化される。デジタル情報やSNSから離れた「自由読書」は、現代社会における「デジタルデトックス」のひとつともいえるだろう。

⁴⁶ 朝の読書推進協議会「朝の読書をはじめましょう～「朝の読書」導入の手引き～」(<https://www.1c-hon.ne.jp/>)

⁴⁷ 林公『朝の読書—その理念と実践』編集工房一生社、2007年：p.41。

⁴⁸ 船橋学園読書研究会『朝の読書が奇跡を生んだ—毎朝10分、本を読んだ女子高生たち』高文研、1993年。

⁴⁹ 三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』集英社新書、2024年：p.234。

「自由読書」のための図書館サービス

この「自由読書」を充実させるために欠かせないことが、「読みたいと思う本」を自由に選び、入手できる読書環境である。日本全国で書店の数が年々少なくなっており⁵⁰、出版市場も縮小、電子出版も電子コミックを除いて減少している昨今、出版物の大部分は人口の集中した都市の大型書店に配本され、地方では本に出会えない状況が続いている。

そこで、今後期待されるのが公共図書館サービスの充実であるが、出版社からは「文芸書やハウツー本でもなく、専門書というほど高度でもない一般教養書の分野は、公共図書館が購入することでお客さまの目に留まり、活用される」⁵¹といわれているように、いまや図書館は本のショールームの役割さえ担うようになっている。

しかし、2000年以降の状況をみると、全国的に図書館の数は増えているものの（2023年で3,310館）、年間の受入（購入）冊数は減っており（2023年で13,547,000冊）、個人貸出数については、やや増えているものの大きな変化はみられない（2004年で609,687,000点、2023年で632,676,000点）⁵²。

このような利用の伸び悩みの要因としては、購入冊数の減少による蔵書の魅力の低下以外では、日常的に訪れる公共施設としてのアクセスの困難さや、本の入手の際の「予約」・「リクエスト」・「貸出」・「返却」の手続きの不便さが考えられるが、これらの不便さを解消するためには、逆説的だが、WebサイトやSNSによる情報発信や、インターネットを通じた図書館の遠隔利用の利便性をより向上させることが必要である。

具体的には、図書館のWebサイトから図書館の所蔵情報だけでなく最新の出版情報も得られるようにし、できればネット書店やネット古書店、電子図書館サービスや電子書籍の購入サイトにもリンクされているようにすることや、さらに、電話や「リクエストカード」によって受けられることの多い図書館未所蔵の本に対する「リクエスト」（購入希望・他館からの借用希望）を、Webサイトを通じて気軽に出すことができるようにすることなどが考えられる。

このように改善することにより、読者が「読みたい本」を探す際、まず図書館のWebサイトにアクセスして、そこから特定することができるようになる。そしてその本が図書館に所蔵されていれば貸出予約をし、まだ所蔵されていなければ「リクエスト」をしたり、自身で購入したりする。

⁵⁰ 2001年の実店舗数は20,939であったが、現在では1万以下といわれている。

⁵¹ 谷一文子『これからの図書館』平凡社、2019年：p.119。

⁵² 『日本の図書館 統計と名簿 2023年』日本図書館協会、2024年。

以上のような「読みたい本」を入手する手続きを、スマートフォンを使った一連の動作で完了させることができるようになれば、図書館は、われわれの読書生活にとって格段に利用しやすいものになるだろう。

現在では、ほぼ全ての図書館に蔵書検索システムがあり、Webサイトを通じて情報発信や電子図書館サービスなども行われているが、このWebサイトの利便性を高め、市民の読書生活を支えるポータルサイトとしてさらに充実させることにより、図書館の利用を増やす。このことが、個人の読書生活の充実と「自由読書」の推進につながると考えられる。

おわりに

本の貸出や返却に加えて、書棚のブラウジング（閲覧）で本に出会うためには、どうしても施設としての図書館に出向かなければならないが、これ以外の図書館サービスについては、われわれの情報行動の中心にインターネットやSNSがある以上、できる限り「遠隔利用」できることが望ましい。

公共図書館は、「その利用者があらゆる種類の知識と情報をたやすく入手できるようにする地域の情報センター」⁵³であり、「図書館とは、本を読んでもらう社会運動」⁵⁴であるとすれば、「本が読めなくなった」現代人のために読書環境を整えることこそ、公共図書館の最重要のミッションなのではないだろうか。「情報収集」のためだけでなく「自由読書」のための図書館利用を増やすことが、これからめざされるべきであろう。

⁵³ 「ユネスコ公共図書館宣言」1994年。

⁵⁴ 前川恒雄『移動図書館ひまわり号』筑摩書房、1988年。